

地域支え合い情報

2019年12月20日発行
本体300円+税

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



お茶飲みの合間、歌声を披露した参加者に、周囲は拍手（宮城県南三陸町／詳しくは2頁へ）

特集

震災後、この地域で 幸せに暮らし続ける

2つの行政区内の交流と

笑顔増やす「幸せな集まり」²

林・大久保スマイル会（宮城県南三陸町）

支援への恩返しが紡いだ縁

——震災後に自宅を開いてお茶飲みの場に⁵

長竹さん家のお茶飲み（宮城県亶理町）

専門家に聞く地域づくりのヒント⁷

東北大学 災害科学国際研究所 教授 岩田 司さん

東北の元気⁷ 8

矢崎神社（宮城県仙台市宮城野区）

水沢南大鐘寿会「演芸みなみ寿座」（岩手県奥州市）

どこでもサロン²⁶ 10

遊福会（沖縄県北谷町）

読み切り連載リレー¹¹

東北学院大学 経済学部 共生社会経済学科 准教授 齊藤 康則さん

被災経験地からのレポート¹²

被災の記憶を語り継ぐ 郷土史の伝承で集落づくり（福島県猪苗代町）

支援員インタビュー⁵ 14

相澤 早苗枝さん（宮城県名取市）

私たちの「地域支え合い情報」活用法¹⁵

宮城県サポートセンター支援事務所の活動日記⁵ 16

震災後、この地域で幸せに暮らし続ける

今回取りあげるのは、東日本大震災後に生まれた、南三陸町のサロンと亶理町の自宅でのお茶飲みです。南三陸町の林・大久保スマイル会は、多彩な内容の催しで行政区の交流を深めています。亶理町の長竹さん家では、自由にくつろげる空間でお茶飲みをしたり、昼食をとったりするなかで、助け合っています。

2つの活動は、震災後の地域を明るくし、一人ひとりがこれから先も地域で幸せに暮らし続けるために、大きな意味をもっています。



林・大久保スマイル会の皆で

2つの行政区内の交流と笑顔増やす「幸せな集まり」

林・大久保スマイル会（宮城県南三陸町）

集会所が津波で流出した大久保行政区（南三陸町）と隣接した林行政区（同）の住民が、合同のサロン活動を行っている。林行政区の「林生活センター」で月1回開いている「林・大久保スマイル会」（以下スマイル会）だ。

お茶飲み、健康・体力測定、気仙沼大島大橋への日帰り旅行、歌の会、安全・安心講話、調理実習、七夕飾りづくり、おしゃれ講座……、スマイ



ル会で行われている活動の一部だ。このように毎週回趣向を凝らした催しを住民主体で企画開催している。活動によっては、南三陸町社会福祉協議会の生活支援コーディネーターが脳トレや体操、ゲームを実施したり、町の地域包括支援センターの保健師が講話を開いたり、サポートしている。活動費には町と赤い羽根共同募金の助成を活用し、参加費は無料だ。

参加者は60～80歳代の女性約20人で、両行政区からおよそ半数ずつ集まる。欠かさず参加しているという千葉とよ子さんは、「みんなの顔を見られて楽しい。私はひとり暮らしだから、ここさ來るのが一番の楽しみ」と笑顔を見せる。同じ



く参加者の阿部久子さんも、「本当に、楽しい。みんなと『元気だ』『今日はどこさ行ってきた』って話をしている」と語る。スマイル会は、生活の楽しみはもちろん、2つの行政区内の交流の場としても一役買っている。

「自分たち住民で何かつくろう」

スマイル会は2013年、両行政区の民生委員・児童委員（以下民生委員）だった三浦則子さんが、住民の閉じこもり防止の目的で始めた。

震災後、行政区内の仮設住宅では、支援団体の催しが定期的に開かれていた。次第にその団体も減っていきななかで、「自分たちで何かつくったほうがいい。お茶飲みから始めよう」と三浦さんが中心になって、スマイル会を設立する。

旧・志津川町（現・南

三陸町）出身で、地縁があった三浦さんには、参加を希望する声が自然と寄せられたという。また、民生委員として自宅を訪問する際にも、参加を呼びかけた。サロンの場で、住民の安否確認ができ、体調の変化などの情報も聞けるので、民生委員の活動にも役立ったという。離れた場所に住み、移動手段のない人には、三浦さんが送迎も行っている。

「参加者から楽しいと言われると、私としてもよかったなと思います」と、三浦さん自身もやりがいを感じながら運営に携わる。

震災後の行政区の状況、スマイル会の意義

林・大久保両行政区は、南三陸町の南西部、志津川湾沿いに位置する。東日本大震災の影響で、林の人口は震災前の226



震災時、建物の前まで水が来たが、なかは無事だった林生活センター

人（11年2月28日時点）から186人（19年10月31日現在）に、大久保は168人から123人に減少している。

両行政区の低地にあった住家は、津波により甚大な被害を受けた。スマイル会の参加者のなかにも、避難生活を余儀なくされた人たちがいる。

大崎市鳴子地区などに約4か月避難したあと自宅に戻ったという住民は、被害状況をこう話してくれた。「天井まで波が来たんです。散らかった家のなかを片づけるのがたいへんでした。」

大工さんと呼んで、壁をはがして柱だけにして、床板を全部とって、床に入った泥をすべて流してもらいました」。現在、自宅は再建し、日常を取り戻している。「林生活センターが残っていてよかった」とかみしめ、スマイル会を「幸せな集まり」と表現する。

震災当時、林生活センターに避難して寝泊りし、日中は損壊した自宅に行き来したという住民は、言う。「冷蔵庫からタンスから皆倒れてたいへんな状況だった。地域の人が来て、片づけを手伝ってくれた。同じ土地に再建したが、近所の人は高台に移転して、いなくなった。みんなどこさ行ったかわからない。さびしい」。そのような状況下でも、スマイル会に来ること、（住民と）顔合わせできる。なんぼか気持ち明るくなる。世のなかのことを話して、情報交換になる」と、力になっている



左奥が代表の三浦則子さん、中央が町社協の生活支援コーディネーターの千葉ユミさん。お茶飲みの合間のお手玉遊びの光景

ようだ。

震災や世代交代の影響によって、「以前のように、隣近所でお茶飲みをしなくなった」(参加者) などと、変化を指摘する声もあった。

震災を経験して、個人の状況、行政区のコミュニティが変化するなかで、スマイル会はつながりの維持や深まりに貢献している。

代表の三浦さんは、震災後も同じ地域で暮らし続けるうえでたいせつな



「ゴミ出し」「荷物持ち」など手元のカードで「私にできること」を考える「近隣支え合いゲーム」



百歳体操に励む参加者

ことを、次のように話す。「心を通じて、お互いにコミュニケーションをとってつき合っていくことが大事。あの人はダメではうまくいかない。ズバツと言う人もいるけれど、それも根にもたず、あっさりしていれば、いいことだと思う。この先もいい関係を維持していきたいらと思います」

活動の広がり

今年に入り、スマイル会に新たな展開があった。三浦さんが運営の中心を担ってきたところに、60歳代の3人が新たに入り、準備や片づけなど

を手伝っている。「助かっている」と三浦さん。長期継続のためにも、役割を分担していくことは、たいせつなことだ。

月1回の頻度で行ってきた活動に加え、9月からは参加者の希望で毎週1回、百歳体操も始めた。体操の効果を得るには、週1回が最適との判断からだ。活動頻度が増えることで、健康増進のほか、日常的なつながりづくりや見守りの効果も期待できる。

変わらない、にぎやかな笑い声が聞こえてくる。スマイル会は、震災後の地域を、明るい笑顔の輪でつないでいる。



ポイント

- 2つの行政区が、多様な企画を通じて楽しく交流。情報交換や健康増進にも効果。
- 震災後にコミュニティが変化するなか、住民間のつながりを維持し、深める場に。



居間の食卓を囲んで昼食のハヤシライスを味わう。左から時計回りに草野せつ子さん（88歳）、阿部勝子さん（82歳）、日下洋子さん（82歳）、森フミさん（89歳）、長竹すみよさん（76歳）、齋藤エナコさん（90歳）

支援への恩返しが紡いだ縁 ——震災後に自宅を開いてお茶飲みの場に

長竹さん家のお茶飲み（宮城県亘理町）



東日本大震災で被災して、在宅で生活を続けていた時に、全国からボランティアが駆けつけてくれた——少しでもその恩返しがしたい。

亘理町在住の長竹すみよさんは、そんな思いから、再建した自宅を開放し、近隣住民を招いてお茶飲みをしている。

**自由にくつろげる自宅での
お茶飲みⅡ支え合いの空間**

開催日は毎月第3土曜日。参加するのは80歳代から90歳代の女性5人だ。メンバーはお茶飲みを始めた約5年前と変わらない。ひとり暮らしで足腰が不自由な人が多いため、長竹さんが車で送迎している。

座ったままできる簡単

なストレッチをすることはあるが、活動のプログラムがあるわけではない。自由にくつろげる、自宅ならではのよさがある。

長年この地域に暮らしてきた人たちだから、集まってきた盛り上がるのは、昔の話だ。普段デイサービスを利用している1人の参加者は、「ここ（お茶飲み）は子ども時代の思い出話できて楽しい」と、同世代の顔なじみで語り合えるよさを口にする。「デイサービスを1日利用しないで行けると、国にそのぶんの保険料をお返しできる」意義もあると、長竹さんは語る。

会話のなかで生活に役立つ情報を共有し、「回覧板で理解できない内容があった」などと心配ごとがあがれば、「役場に相談に行ったらいい」などと、助言や協力し合う。

昼食には、長竹さんが腕によりをかけた季節の手料理を皆で味わう。食後にもゆつくり談笑したあと、皆すっきりして、元気になって帰る。「そうした姿を見て私もうれし

い」と長竹さん。

参加者にとってこのお茶飲みは、「遠慮しないで楽しみに来ている」(日下洋子さん)、「気を遣わないでなんでも話せる」(阿部勝子さん)空間だという。参加費はかからないが、感謝の気持ちとして200円ずつを長竹さんに渡している。料理好きな参加者は、家で作った一品を差し入れる。耳が遠い人には、周囲が耳元で内容を伝えて助ける。参加者の一人が入院した時は、皆で見舞金を出し合って、見舞いに行った。お茶飲みの方は、そうした支え合いの關係に包まれている。

長竹さんのことを、「本当にありがたい。(送迎のついでに)ゴミまで捨ててもらえる。気配りして尽くしてくれています」と、草野せつ子さんは、参加者の思いを代表して語る。

長竹さんは、「お友だち同士でやっている普通のお茶飲み」とこの場を説明し、「周りから自分が助けられている。昔からいる皆さんに、亘理のことをいろいろ教えてもらっている」とも



長竹さんの自宅で飼っているペットの犬も、時折場にまざっては、和ませる

語る。転勤で町に移住し、知り合いが少なかったという長竹さんは、お茶飲みを開いたことで、地域のつながりがわかった、と言う。「被災してたいへんな思いをしたが、その代わりにこうしてお友だちと知り合えた」。そう振り返る。

「あの時は本当に世話になった」。在宅被災者として、考えてきたこと

長竹さんは震災当時のことを話してくれた。

震災当日、長竹さん夫婦

の居住地区は津波に襲われた。2人は車で高台に避難し、漂流物でふさがった道が開くまで3日間車中で寝泊りした。その後、人がいっぱいだった避難所には入らず、自宅に戻って生活する。家の1階は津波の浸水被害が大きかったものの、2階は幸い無事で、冷蔵庫(のの中身)や寝具、衣服を使うことができた。

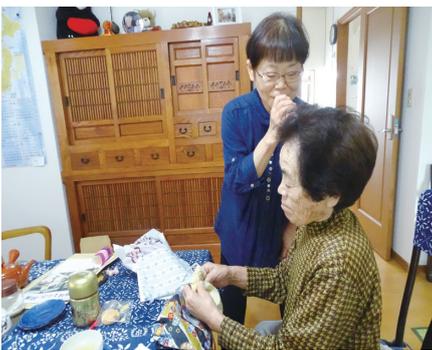
「2階にも、もの(衣食)を分けておいてよかった。震災を経験して、シンプルな生活が一番で、必要以上の贅(ぜいたく)品は持ち出せないからいらないと、強く感じている。(現在は)いざという時に、通帳と携帯電話を持って逃げられるように、一つの荷物にまとめている」

震災時に、特に困ったことは、「トイレとゴミをどう処理するか」と「避難所にいないことで、もらえない支援物資があったこと」。周りにほかの人がいないことで、心細い思いもあった。

やがて、長竹さんの自宅にも、ボランティアが入って、炊いたおにぎりを配ってくれたり、自宅の泥かき

作業などで力になってくれた。ある時は、「お掃除ばかりじゃ(あなたたちも)参るでしょう」と長竹さんが相談して、ボランティアにバイオリンやフルートのミニコンサートを自宅で催してもらった。「ああいう時だから余計に、ほっとしたし、楽しかった」といまでも心に残る。「音楽やマジックといった支援は、避難所に来てくれるが、住宅までは(なかなか)来てくれない」と、在宅被災者に求められるもう一つの支援を語る。

「全国から大勢の人に支援してもらった。お礼をしたいけれど、しようがない。身近にいる人を助けることで、少しでも受けた恩



耳が遠い齋藤さんに耳元で語りかける長竹さん

を返したい」。震災後、自宅を再建した長竹さんはそんな思いを強めていた。隣に住んでいた民生委員・児童委員や亘理町社会福祉協議会の職員に相談して、地域とのつなぎ役になってもらった。顔なじみのなかった近隣の高齢の住民に声をかけ、お茶飲みを始める。「お茶飲み友だちのなかに、家族とバラバラになった人もいるけれど、その人もいまは落ち着いて、楽しみを見出している」と長竹さん。お茶飲みは、震災後の心安らぐ時間の一つになっっているようだ。未曾有の災害を経験したが、少しずつ日常を取り戻してきた。現在、長竹さんはお茶飲みを開くとともに、岩沼市にある交流サロン「グリーンリーフ」で、ボランティアとして運営を手伝い、そうしたかわりによるこびを見出し出している。「してもらうより、してあげるこびが気持ちいい。自分のできることをする。それが幸せということ」。活動の源泉をそう語る。

ポイント

- 自宅でのお茶飲みは、自由にくつろげ、同世代と語り合える場だ。元気のもと、支え合いのきっかけにつながる。
- 震災を機に生まれた関係性がある。受けた恩をほかの人につなごうと、自宅でお茶飲みを開くことで、つながりが広がった。

専門家に聞く地域づくりのヒント

元気の源・人々の集い「集まる場」をつくる

災害公営住宅では居住者の高齢化が問題となる 경우가多く、そのための見守りシステムとしての緊急通報装置などが設置されます。これは訪問型見守りサービスとともに必要不可欠なものになりつつあります。

ところで公営住宅というと廊下沿いに鉄の扉が並び、なかの様子は伺いづらいという一般的なイメージがあります。これでは見守りシステムも役に立たない可能性があります。

1983年に始まった建設省（現国土交通省）の事業である地域住宅計画では、地域の住文化に根ざした住まい・まちづくりが推進され、このなかで地場産材の活用や地域の住まい方、高齢社会などが考慮されたすばらしい木造の公営住宅が多く建設されました。木造の場合、1～2階建てが普通で、廊下側からも庭側からもなかの気配を感じることができます。またお年寄りにやさしいバリアフリーも進み、木の香り漂う住まいも心が癒やされます。

東日本大震災でも地方部を中心にこれまでのさまざまな配慮を施した木造災害公営住宅が建設されました。そのなかでも石巻市の「にっこり団地」の災害公営住宅では設計に住民が参加し、2戸ごとに玄関先に共用の広い玄関庇が設けられ、そこにはベンチや手づくりのテーブルがおかれ、毎日近所の人々が集まり、日がな一日お茶とお菓子で世間話に花が

東北大学 災害科学国際研究所 教授

岩田 司

（いわた・つかさ）さん



東京大学大学院工学研究科修了。工学博士。建設省建築研究所、国土交通省国土技術政策総合研究所を経て、2015年より東北大学教授。学生時代から地域の住文化に根ざした住まい・まちづくりに関する研究を行い、東日本大震災では宮城県の災害公営住宅建設推進の役割を担う。福島県三春町など全国での多数のまちづくりや、宮古島の木造生活体験施設「かたあぎの里」（建築学会九州建築選）等の住まいの計画、設計など、一貫して地域の住まい・まちづくりを実践、研究している。

咲いています。開催場所はほぼ一定ですが、日差しの強い夏の夕方などは陰になる別の玄関先で開催するそうです。私が取材に訪れた日は、向かいの駐在所のお巡りさんの子どもさんが遊びに来ていました。憩いの場であり、癒やしの空間でもあります。これこそが本当の見守りです。そして、このような場を届けるのも設計者本来の大きな役割なのです。

南三陸町の林・大久保スマイル会では、被災しなかった生活センターを隣接した地区の住民と共同で利用することによって、お茶飲みからの世間話に始まって、講演や勉強会、実習、果ては小旅行と、活動がさまざまな分野に広がっています。亘理町の長竹さん家では、自宅を提供してお茶飲み会。体験談が契機となり、さまざまな問題が話されています。それぞれに集う空間を住民自らが工夫し、すばらしいコミュニティが形成され、高齢者同士の見守り、支え合いが実現しています。

人が集うところに会話が生まれ、共同の作業が芽生えます。まさに元気の源です。前途のにっこり団地でもチューリップの花壇づくりが行われています。にっこり団地も林・大久保スマイル会も長竹さん家も、これからもおしゃべりの絶えない、楽しく美しい地域として住民とともに生き続けてゆくことでしょう。



79回目

市民リレー

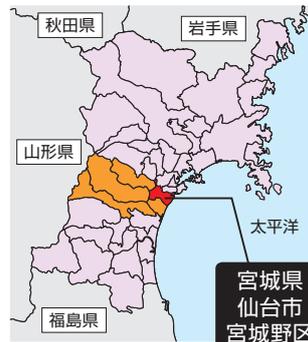
東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

神社と住民間のつながりを守る

◎矢崎神社(宮城県仙台市宮城野区)



たくさんの手料理は、夕食用にそれぞれが持ち帰りも



花見など、季節の行事も地域の楽しみ



清掃などまめな維持管理が集いの場を守る

月2回、地域住民の集いの場になる、小さな神社がある。宮城県仙台市宮城野区の岩切地区、田畑に面し朱色の鳥居が映える、「矢崎神社」だ。

毎月1日・15日、午前10時頃から有志の住民が境内の清掃をする。2人で作業を始めることが多いが、11時頃にはさらに数人が集まり、社殿内でお茶会が開かれる。同神社には神主がない代わりに、管理を住民の伊藤良則よしのりさんが務めている。代々「(家)主さん」と呼ばれる家で、その家の人も毎回お茶会に参加する。定例の日には皆さんの都合が悪い場合は、翌日に延期し、顔を出してもらおう。

老人会などが掃除をすることもあったが、いまのような形での清掃が定着したのは、およそ40年前に、病気を患った男性が、リハビリを兼ねて境内の草取りなどを始めたのがきっかけ。近所の人が神社の前を通れば、作業の手を止めて声をかけ合ったりもして、ちよつとした交流の場でもあった。その後は、会の代表を担っ

ている佐藤勝次さんらが清掃を引き継いで行っている。

お茶飲みは、それよりも昔から「お明神さん」と呼ばれて行われていたもので、春の花見、秋の芋煮、冬には冬至祭りなども行い、20人ほどが参加することもある。「ふだん自分ではつくらないものを食べられる」「接待するのが好き」と、手料理の持ち寄りも皆の大きな楽しみ。さらには社殿内にカラオケ機器を設置し、歌声や笑い声を響かせながら、にぎやかに過ごす。この地域で生まれ育った人がほとんどで、つきあっても長いため、話がよく合う。「互いに言いたいことを言いやすく、家の話もできる」と佐藤さんは話す。

夫婦で参加するメンバーもいれば、独り身のメンバーも少なくない。誰かが休むと、その様子が気になるため、見守りのような役割も果たす。また、台風で女性メンバーの自宅にある小屋が倒れた際には、男性メンバーたちが小屋を建て直すなど、日常的に気にかけて合う間柄が、助け合いを生み出している。

清

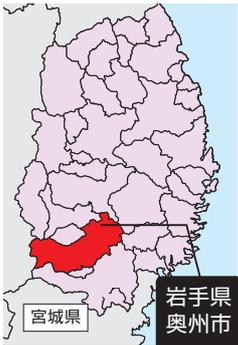
東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

拍手と笑顔で近づく 距離感

◎水沢南大鐘寿会「演芸みなみ寿座」
(岩手県奥州市) ライター：元持幸子



DATA

水沢南大鐘寿会 「演芸みなみ寿座」

〒023-0855

岩手県奥州市水沢南大鐘 1-7

(拠点)

南大鐘・龍ヶ馬場 みなみ集会所



地域に広がる互いに声をかけあえる仲間たち



参加者も飛び入り、スコップ三味線のステージ

活動を伝える瓦版やチラシは、事務局長村上徳也さんお手製

「演芸みなみ寿座」は、岩手県奥州市水沢地区の水沢南大鐘寿会（老人クラブ）のメンバーが中心の演芸一座だ。座員は16人で、平均年齢は70歳を超える。舞台は、東日本大震災の被災地の仮設集会所への訪問がきっかけで始まった。演目は、日本舞踊、フラダンス、マジック、ギターに民謡と幅広い。「訪問先で『また来てくださいなね』と言われることが何よりの力になっています」と、水沢南大鐘寿会「演芸みなみ寿座」会長の高橋安三郎さん（90歳）は、これまでの活動を語ってくれた。

震災発災後、内陸部の奥州市には沿岸各地より約300人が避難してきた。同市南大鐘地区では、避難してきた人々へ地域ぐるみで日用品や暖房器具などを持ち寄り、生活支援を行った。2013年3月、震災後の地域や仮設住宅での暮らしのたいへんさが耳に入るようになってきた。被災地へ元気や気持ちを届けたいと、水沢南大鐘寿会の芸達者が集まり、「演芸みなみ寿座」を結成する。

5年間で、仮設集会所や災害公営住宅集会所23か所を訪ねし、会場や人数にあわせて、その時でできることを精いっぱい行ってきた。お楽しみ演芸のほかにも、一緒にお茶を飲みながらさまざまな話を聞いてきた。18年には、沿岸部で知り合った人々を同市へ招待して交流会を開催し、19年には、移住者とともに「被災地の想い、心のふれあい・ふるさと交流会」を開催した。知り合った人々との交流は、いまでも続いている。同地区の人びともこうした取り組みに関心を寄せ、マイク、バスや衣装、交流会の準備などで協力する。

副会長の及川洋子さんは、「身の周りでの災害への備えを見直さないといけない」と話す。この活動が日頃の災害への備えを考えるきっかけにもなっている。

最近では、「演芸みなみ寿座」は、地区行事や高齢者施設などからも声がかかり、移住者も含めた地域内交流づくりにも一役買っている。「元気を届けるばかりではなく、会場の方々の拍手から自分たちも元気をもらっている。今後も『忘れない、風化させない3・11』を心に一座を続けたい」と、皆声をそろえて語る。



どろろでもサロン

第26回

自然なつながりと支え合いを生み出す



畑仲間のつながりづくり

遊福会（沖縄県北谷町玉上なけーま地区）



60〜80歳代の男性11人が月に1度、家庭菜園で育てた野菜や果物を持ち寄り、調理して食べる——そんな集いの場が、沖縄県北谷町玉上の「なけーま（仲山）」地区で20年近く続いている。

北谷町は人口2万8972人、高齢化率19.6%（2019年4月末）。再開発で高層マンションや大型商業施設の建設が相次ぐ一方、歴史の深い地区では沖縄の伝統的な生活文化がよく保たれている。なけーまもそうした地区のひとつ。

毎月集まるという11人のうち8人は地区で生まれ育った住民で、3人は仕事を通じて住民と知り合った町外の人たち。「全員、趣味は畑仕事。この共通項で意気投合したんです」と説明するのは、メンバーの比嘉良美津さん（67歳）。

比嘉さんによると、栽培のコツや収穫物の上手な調理方法などを教え合ったり、種や苗を融通したりするうち、2000年春頃に「親睦と語らいの場をつくろう」となった。メンバーの一人が空き地を提供、そこに12畳ほどの小屋を建て、週末に集まった。この集会を「遊福会」と命名。2008年になると農業や地域活性化につ

いての見識を高めようと県内外への研修旅行を企画。集会は月1回で定例化し、毎回1人3千円の会費制にした。このうち千円を飲食費にあて、2千円を旅行費として積み立てる。

こうした会費積立型の親睦組織は、沖縄では「模合」と呼ばれる。かつては本土の「無尽講」や「頼母子講」に相当する金融互助の枠組みだったが、現在は飲み会、食事会、団体旅行といった娯楽や親睦を目的とするものが多い。地域や職場、学校などの気の合う仲間と結成、運営する。

遊福会は模合へと発展し、継続。小屋はその後、立地する土地が公共事業用地となったため撤去を余儀なくされた。活動拠点を地区集会所に移し、現在に至る。

研修旅行はこれまでに沖縄本島北部の農業地帯をはじめ、愛媛県、大分県、北海道など4か所を訪ねた。日中は視察などを行い、夜は宿で地産地消や食育、スローフードなど「食と農」をテーマに熱い議論を交わした。

会長の崎原盛吉さん（81歳）は「仲間が集い、語り合い、飲食をともにしながら互いの気心を知ります。そうして信頼を深め、いざ



というときは助け合うわけです。模合も「ミニミニのひと」と話す。同好の士の集いや語りにも、暮らしやすい地域づくりに通じている。木

変化する仮設住宅 ～開かれた関係性は、いかに築けるか

さいとう・やすのり

1977年、東京都生まれ。大分大学福祉科学研究センター任期制講師などを経て、2011年、東北学院大学経済学部専任講師、2012年、同准教授。専攻は地域社会学、災害社会学。共著に『東日本大震災と〈復興〉の生活記録』（六花出版、2017年）、『震災復興と展望』（有斐閣、2019年）、論文に「なぜ災害ボランティアは農業支援に向かったのか？」（『震災学』12号所収、2018年）など。

今年もまた各地で災害が相次いだ。とりわけ9月上旬に発生した台風15号、10月中旬の台風19号は関東甲信越、東北地方に大きな被害をもたらし、官民挙げての復旧・復興が進められている。風水害に限っても九州北部豪雨（福岡県・大分県）、西日本豪雨（岡山県・広島県・愛媛県）と3年連続である。戦前の物理学者、寺田寅彦の警句とされる「天災は忘れた頃にやってくる」は、すっかり過去のものとなったように感じられる。

仮設住宅の歴史

災害により住家を喪失した被災者にとって、中長期的な生活の場となるのが仮設住宅にはほかならない。阪神・淡路大震災のプレハブ仮設で発生した「孤独死」への反省から、それ以降の災害では従来の集落ごとに入居するなど、コミュニティを重視した政策が取られてきたことは周知のとおりであろう。ただし東日本大震災以降、その様相は変化

しつつある。自治体が民間賃貸住宅を借り上げ、そこに被災者が入居する「みなし仮設（借上型仮設住宅）」が主流化したからである。

その後の熊本地震、西日本豪雨では仮設住宅全体に占める「みなし仮設」の割合が7割を超えるまでになった。この間、被災自治体の社会福祉協議会などを受け皿として「地域支え合いセンター」が設置され、要援護者の友愛訪問、被災者同士の交流の場づくりが進められてきたが、コミュニティ形成、生活支援の面で、被災者が「見えない仮設」に入居し（見えない被災者）となってしまう困難は決して少なくない。

さて、「令和元年台風災害」における仮設住宅政策の特徴は、過去の災害で設置されたプレハブ仮設を再利用する一方（福島県郡山市・いわき市など）、政府省庁が「みなし仮設」の活用に向かうなか、被災自治体が一定数のプレハブ仮設の建設を

要求している点にある（宮城県丸森町など）。そもそも賃貸住宅が少ない中山間地域で「みなし仮設」を活用しようとするれば、中心部への一層の人口流出が引きおこされるばかりである。被災住民、被災自治体の意向を重視した仮設住宅のあり方は、その後の災害復興、地域再生の第一歩となる。被災者自身の所有地へのトレーターハウスの建設なども、積極的に検討されて良いはずだ。

関係づくりの眼目

プレハブ仮設と「みなし仮設」を併用する際の留意点として〈支援格差〉があげられる。東日本大震災では、支援物資や炊き出しなどのイベントが〈見える仮設〉であるプレハブ仮設に集まりやすかった。仮設団地の集会所を当該の入居者だけでなく、「みなし仮設」入居者、在宅被災者など広義の被災者のコミュニティとして位置づけなければ、被災者間には否応な

く〈支援格差〉が発生することになる。この点は入居期に自治体が交通整理しておくべき問題である。

また、仮設住宅における入居者の関係性は必ずしも安定的なものではない。つまり、住宅再建の方向性の違いが顕在化するにつれて疎遠になることも、退去が進むなか、残された人々の孤独感が深まることもある。それゆえ仮設自治会だけに限られた人間関係は、脆弱なものとなりがちである。その一方、時間経過とともに、被災者は「仮設住宅のある地域社会」に住むという様相を見せるようになる。仮設団地の集会所を拠点としながら、その外部の地域社会においても、文化・スポーツなどの趣味をめぐってアソシエーションな関係を存続、形成できるよう（仮住まいの形態によらないコミュニティ）という視点も、これからの被災者支援には必要ではないだろうか。

被災の記憶を語り継ぐ

郷土史の伝承で集落づくり



〔猪苗代町長坂地区と1888年磐梯山噴火災害〕明治21（1888）年7月15日午前7時45分頃、福島県会津地方にそびえる磐梯山（1816メートル）が噴火。爆風や岩なだれ、土石流などにより猪苗代町、磐梯町、北塩原村の計477人が犠牲となった。猪苗代町長坂地区は磐梯山東麓にある農村集落。噴火に伴う土石流が押し寄せ、当時暮らしていた25世帯149人の約6割に当たる86人が亡くなった。現在の地区人口は23世帯77人、高齢化率40.3%。町全体では5337世帯1万4023人、高齢化率37.4%（2019年9月末）

「噴火から1時間ほどは、火山灰で空が真っ暗だったそうです」。こう話すのは山内愛子さん（85歳）。猪苗代町長坂地区で生まれ育ち、いまも夫や息子夫婦、孫夫婦、ひ孫らとの9人家族で地区に暮らす。噴火の様子は「私が子どもの頃、母方の曾祖母に当たるミナばあちゃんから聞きました」

ミナさんは噴火当時20歳代で、5歳の子どもがいた。「暗かった空が少し明るくなると、ミナは自分の子の手を引き、近所の家に一人でいた3歳の親戚の子をおぶって避難を始めました」

磐梯山から遠ざかろうと、山裾の高台にある集落と、山裾の北東へ、田畑のある低地を抜けて向かい側の白布山（1221メートル）を目指した。ミナさんが田畑へ降りたそのとき、土石流が押し寄せる。土石流は磐梯山の北側斜面で発生、川筋に沿って北から東、南へとU字型に方向を変えて流れ下り、長坂を襲った（図参照）。

「磐梯山から離れようとして逃げたのに、土石流は予想外の方向から田畑へ流れ込んできました」

3人は押し流され、離れ

ばなれに。「ミナは結っていた長い髪がほどけ、木に絡まって流されずに済みました。木にしがみついたまま気を失っていました。ふと気がつくと子どもの泣き声が聞こえました」

泣き声のほうを見ると、連れて逃げた2人の子どもが、自分のいるところから数百メートル離れた、土手のような場所に座り込んでいます。地形的に土石流が突き当たる位置にあり、うまく流れに乗って這い上がることができたらしい。

「ミナは木に絡まった髪を

引きちぎり、子どもたちのもとへ駆け付けました。ああ生きていた、よかった」と泣いてよるこびました。泥だらけで家に戻り、布団を敷いて一緒に休んだそうです」

ミナさん宅を含め、家々のほとんどは高台にあり、低地の1、2軒を除いて住宅被害を免れた。

「親戚の子は両親と兄をこの災害で亡くし、一人きりになってしまったので、ミナの家で引き取りました」

この引き取られた子が、山内さんの母方の祖父となる。長坂で犠牲になった人の大半は、当時田畑で作業中だったか、あるいはミナさんのような避難行動を取って土石流に巻き込まれたと推測される。

「家」の継続を最優先に

山内さんのほかにもう1



土石流はU字型に回り込むような経路（赤矢印）をたどって長坂を襲う

人、被災の記憶をいまに伝える人がいる。

渡部昭子さん（85歳）は60年ほど前、隣の集落から長坂の渡部家に嫁いできた。その頃、家には夫の曾祖母に当たる90歳近い女性がいる、渡部さんに特異な経験を明かした。

「もらい返して、何のことかわかりますか」と渡

部さん。「他家に嫁いだ娘を離縁させ、実家に戻して家を継がせることです。私の夫の曾祖母、渡部トキは、もらい返しだったので」

渡部家は災害当時、トキさんの姉が婿をもらって家を継いでいた。土石流で7人家族のうち5人が亡くなり、家には婿とトキさんの父の男性2人が残された。

「これでは家が絶えてしまうというので、すでに隣村に嫁いでいたトキを呼び戻し、亡くなった姉の代わりに婿と再婚させました」

トキさんの当初の嫁ぎ先は造り酒屋だったという。「相手は20歳も年上の酒屋の旦那。後妻でしたが、

トキはたいそう大事にされ、幸せだったようです」

もらい返しの申し入れを酒屋の主人は泣く泣く受け入れたらしい。

「隣村から実家へ戻る途中、名水の湧く場所があるんですが、そこで酒屋の旦那と水杯を交わして別れたそうです」

実家に戻ったトキさんは女兒をもうけた。女兒はの

ちに渡部さんの夫の母、つまり姑になる。姑も夫も故人となり、渡部さんは現在息子夫婦と3人暮らし。

「もらい返しなんて、いまはあり得ませんよね。昔の人には、家や家系は、個人の都合よりずっと大事なものであったんでしょう」

長坂は、人的被害だけでなく、流入した土砂で田畑がほぼ壊滅状態となった。農地の復旧には数年を要したと見られる。

「昔の人たちが一生懸命、家や村（集落）を立て直してくれました。だからいま私たちが、こうして暮らしているんです」

生活再建には、全国からの義援金や救済金が役立てられたほか、周辺の人びとによる有形無形のさまざまの支援と、長坂の残された住民による懸命の努力があった。もらい返しもそのひとつと言える。

まとまりのよさ受け継ぐ

個人よりも家や集落を優先する生活文化は、現在

では共感しがたい部分もある。そこも含めて、地域の記憶として語り継ぐ。先人の労苦を感じ取り、命や家族、地域防災、住民同士のつながりなどについて考えを深めるきっかけになれば——そんな思いを抱きつつ、山内さんと渡部さんは年数回、語り部として地元の中学生やツアー客らに話を聞かせている。

語り部活動の調整役を務める長坂老人クラブ会長、

黒澤孝さん（75歳）は「この住民はともまともまりがいい。大災害を一丸

となって乗り切った昔の経験も無関係ではないはず」と話す。

そのまとまりを示すエピソードのひとつに、2001年から「一集落一農場」の理念を掲げて取り組んだほ場整備事業がある。ほ場整備は、事業費負担や換地手続きを巡って地権者の合意形成が難航することが珍しくない。長坂では話し合い開始からわずか1年あまりで合意率100%を達成。

水田の大区画化などを行う事業は2005年着工し、2010年に完成を迎えた。かつて土石

流が流れ込んだ農地約21畝（水田19畝、畑地2畝）は、地区の農家が結成した農事組合法人を中心とする営農体制が組み立てられて、耕作放棄地もなく、秋には一面黄金色の穂波が揺れる。

畑地の一角には、廃品の物流パレットでつくったアウトドアデッキが置かれ、高齢の男女十数人が日々の農作業の合間にお茶飲みを楽しむ。

長坂ではまた、多くの集落行事が比較的よく保たれている。伝統の祭りや講、水路・道路・寺社・集会所の維持管理や修繕を行う普請人足、自治会の定例会議など、月に一度は住民が集う機会がある。これらは通常、慰労と親睦の宴席がセットされている。

「まとまりがあるから行事が続く。行事を続けるからまとまりを保てる。そういうことでしょうね」

長坂老人クラブは2017年2月、被災の歴史をはじめ、集落の年中行事、名所旧跡、伝統的な信仰や生活文化、ほ場整備の経過などをまとめ、『いつまでも残したい長坂の風景』と題する冊子にした。

「地域の歴史と記憶を伝えていくことは高齢者の役割。住民のまとまりを保ち、暮らしやすい集落をつくるのにきつと役立ちます」

郷土史を記録し、語り継ぐことも重要な集落づくりだ。木



かつて土石流が押し寄せた農地を眺める（右から黒澤孝さん、渡部孝子さん、山内愛子さん）。土石流は写真の中央奥から右側へと流れた



支援員インタビュー

5

名取市は、2012年1月から、被災者支援の目的で「名取市サポートセンター『どっと・なとり』」を開設し、「被災者サポート生活相談員（以下相談員）」を配置（本紙74号参照）。みなし仮設住宅（借上げ賃貸住宅）入居者や在宅被災者らを対象にした見守りを、被災者が復興公営住宅や再建した自宅へ移転したあとも、継続的に行っている。現在の相談員は5人体制で、平日には毎日、月一回は土日のいずれか一日、訪問に出ている。同センターは19年度で閉所を予定。19年9月末までに住民への支援体制を関係機関につなぎ終えたが、独居高齢者を中心に一部の見守りは継続している。相談員の相澤早苗枝さんに話を聞いた。（聞き手…田中義則）

―相談員になったきっかけは？

相澤 前職で名取市の臨時職員をしていた時に、ほかの職員から紹介され、2015年から相談員となりました。

津波でなくなりましたが、私の実家は開上で50年ほど続いたお店でした。相談員として訪問すると、お店で顔見知りだった方から「あがっていきなさい」と言っていただけのこともあり、この仕事に入りやすかったですね。

―相談員として心がけてきたことは？

相澤 傾聴と適切な距離感です。心の思いを吐き出していたことが大事ですが、最初は天気の話から入ったり、相手が言いにくいことを察したり、適切な距離感を図っています。それから、専門機関につないで終わらせず、つなぎ先に「どうでしたか」と聞いて情報交換し、その後も住民のもとを訪問するようにしています。



相澤 早苗枝さん

名取市サポートセンター「どっと・なとり」被災者サポート生活相談員

―訪問先で印象に残っていることは？

相澤 最初の頃、「あんなたち来てもなんにもなんね」という言葉に傷ついたこともありました。同行した「みやぎ心のケアセンター」の職員から、「相澤さんに言っているわけではなくて、その人は誰かに思いをぶつけたかっただけだから、気にしないで」と言われて、「またがんばろう」と思えました。「いつも来てもらってありがとう」とにこやかに言っていたいた時は、「ああ、来てよかった」と思います。ご年配の元気な方と話す時、将来自分もこうありたいと、逆に元気をいただいています。

いまは訪問軒数が絞られ、以前よりじっくりお話ができません。そのことで聞くことができな悩みもあります。

―当初と住民の変化は？

相澤 皆さん、落ち着きを取り戻してきました。復興公営住宅や再建した自宅へ入居する

と、やはり晴れやかな気持ちになる方が多いです。

みなし仮設住宅の入居者に対しては、移転後も訪問して、状況を把握してきましたが、「別々のみなし仮設住宅にいた家族が再建後に同居していき過ぎている」といった話を耳にします。心の変化を身近で見ているので、ほかの相談員も一緒によるこんでいます。心配な状況があれば、見守りは続けています。

―切れ目のない支援を行い、住民の力になってきました

相澤 事業は今年度で終わりますが、とにかく訪問してきた皆さんに健康で元気でいていただければいいと思います。会いたいとも思います。もし、こうしたなんらかの支援の仕事があれば、また携わっていただければいいと思っています。

私たちの「地域支え合い情報」活用法

～「地域支え合い情報」読者・取材協力者の声

おかげさまで、本紙は発刊から8年目を迎えることができました。その間も、地震・台風・土砂被害などがありました。全国の約3～4割が被災地といっても過言ではない、という学識経験者の指摘もあります。

これからも、東日本大震災や各地の被災地の声・思い・経験をつなぐとともに、支援に当たられている方々に役立つ情報を提供して参りたいと考えております。そこで、過去の読者アンケートの回答者（81号掲載）や定期購読者、取材協力者の方々に、どのように本紙をご活用いただいているか聞き取り調査を行いました。その結果と、これまで読者や取材協力者からお寄せいただいた声（一部）をあわせて、ご紹介します。

●掲載団体を視察

大和町の区民による交替制の新聞配達の記事（60号掲載）を読んだことがきっかけで、鶴巣山田地区の区長に実際にお会いして、お話を聞きました。

少子高齢化で一軒家には新聞を配達しないで郵送する地域もあるなかで、鶴巣山田地区の事例は、少子高齢社会における新聞配達の先行事例で、たいへんよい、参考になる取り組みだと思えます。

地域には眠っているお宝がいっぱいあるので、取材する方にはアンテナを高くして、多くの人に知らしめる努力をさらにしていただければと思います。

（前・三本木民生委員・児童委員 / 宮城県大崎市 黒木一吉さん）

●活動者の自信、活動の広がり

下茨田健康体操クラブの取材（47号掲載の災害公営住宅でのラジオ体操）によって活動が認められて、活動者の自信につながった面があります。取材してもらえたことで、活動の意味を再確認するきっかけになったのでは。その後、未参加の住民にも声をかけて、ラジオ体操に誘っていると聞きます。モチベーションがあがり、新しい人を迎える原動力につながっているのだと思えます。

（亘理町社会福祉協議会 / 宮城県

復興支援コーディネーター 川端 康裕さん）

私の地域にある仮設住宅は、今年度で供与期間を終えます。今後、住民同士で見守り合い、助け合ってもらうため、「地域支え合い情報」も活用して、住民に見守りのたいせつさを伝えています。（民生委員・児童委員 匿名）

町内会や地元の福祉活動の記事に興味深く見えています。災害発生時にすばやく対応できるようにするためにも、「地域支え合い情報」に載っている活動を参考にしたいと思います。

（民生委員・児童委員 匿名）

●地域での活動例として勉強

自治協議会が設立され、そのなかに福祉部会がおかれました。それまで福祉関係で活動してきた団体を本部会の構成団体とし、この地区の福祉組織づくりを行っています。そこでこの情報紙を活用・参考に使っています。何気ない「近所のお茶飲み」もたいせつな交流の場の一つとして改めて認識することができました。この情報紙を参考にもっと地域の「宝」を福祉部会の皆さんと発見していきたいです。

（中谷地区自治協議会福祉部会 / 福島県石川町 吉田真澄さん）

●県外避難者へ情報提供

東日本大震災による岡山県への避難者の情報提供に、「地域支え合い情報」を活用しています。避難者への各種案内では、支援団体から提供される情報を記載したチラシ等を配付する際に、「地域支え合い情報」のホームページのURLもリンク先としてお伝えしています。

（岡山県危機管理課危機管理・国民保護班 主事 大樂雄人さん）

●支援の情報源、住民の情報周知に活用

スタッフ間で「地域支え合い情報」の内容を共有しています。加えて私たちの活動先である、玉浦西地区（集団移転地域）の住民の皆さんにも見ていただけるよう全戸回覧しています。

震災から既に8年が経過し、生活状況や住民の方々が求めていることもだいぶ変わってきていることから、現在は住民の自立支援・地域の活性化のための活動に比重をおき、そのうえで本紙は貴重な情報源となっています。また活動対象地区である玉浦西のみならず、市内近隣地域の町内会役員の方々へもお配りし、「地域支え合い情報」を活用させていただいています。

（岩沼市スマイルサポートセンター / 宮城県）

「地域支え合い情報」の住民さんの生活、取り組みの記事を拝読して、行政の私たちは、住民さんや民生委員さんたちに支えられていることを改めて感じました。（行政職員 匿名）

取材を受けることで、自分たちの活動を見直す機会となりました。専門家からコメントをいただき、第三者からどう見えているか勉強になりました。（地域活動団体 匿名）

このほかにも、「取材してもらった記事を自団体の広報に活用した」「記事を大学の講義で使用した」「サロン運営の際に実例として参考にした」などの声もいただいています。

「言葉はこぼれ落ちるパンくず」

このたびの台風19号の被害に遭われた皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

当支援事務所もまた、宮城県災害ボランティアセンターの運営支援や、社協、NPO、弁護士会等多職種との連携による相談会などを行っています。

大きな災害が起きると一気にさまざまな支援者が動きます。その時にたいせつなのは現地の声に耳を傾けること、そして支援者たちそれぞれの思いのすり合わせです。でもそれは一筋縄ではいきません。今回の台風被害後も、たくさんの支援者が目的をひとつにして連携し合うための場づくりが行われていますが、共通理解には時間と根気が必要です。

支援者支援が役割である当事務所では、震災後多くの支援者から悩みを聞く機会がありました。そのなかでも、「自分の思いをうまく言葉にできない」「言葉にできても相手に伝わらない」という悩みはとても切実でした。

「私たちの言葉は、思考というご馳走からこぼれ落ちるパンくずにすぎない」。数年前にどこかで聴いて心に響いた、レバノン出身の詩人、カリエール・ジブランの言葉です。頭のなかで考えていることと、話

すこととの間には大きな隔たりがあることを表現しています。どんなに弁が立つ人でも、言葉で表現できる自分の内なる世界はほんの一部だということ。

そもそも、自分について自分自身でさえ理解していない部分がたくさんあります。しかも言葉はパンくずだとすると、人に考えが伝わらなかったり、すれ違いや誤解が生じたりすることも仕方のないことなのかもしれません。

伝わらないと悩んでいる方への答えには全くならないけれど、個人的には「聞き手」の姿勢が大事だと思います。

言語的なコミュニケーションに頼りすぎないこと。それと対話している相手のなかにどんなご馳走（思考）があるのだろうと思いをながら話を聴くこと。対人援助の基本でもあり、仕事上や日々の人間関係でも同じことが言えると思います。当然、今回のような災害時にも同様のことが言えます。

言葉も伝える力もちろん大事だけれど、万能ではありません。でもご馳走（思考）は誰のなかにも必ずある。非常時にこそ傾聴の姿勢を示したいと、あらためて心に刻みました。（真壁さおり）

宮城県内の研修のお知らせ

令和元年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<地域支え合いの発見の仕方～かかれた資源を見つけ出せ～>

【大河原会場】1月27日(月) 世代交流いきいきプラザ(11月22日(金)会場:総合会館ララ・さくら より変更)
講師:池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)
木村 利浩(全国コミュニティライフサポートセンター 出版・開発グループ 地域支え合い推進プロジェクト 開発主査)

令和元年度 宮城県地域福祉コーディネーター研修事業

<生活支援サービスの立ち上げと運営の方法>

【仙台会場】12月23日(月) エスポールみやぎ
講師:吉田 瑞穂(大分県中津市社会福祉協議会 地域福祉課 課長)
高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)
池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

<地域福祉コーディネーター基礎・実践研修>

【柴田会場】1月14日(火)～15日(水) 柴田町地域福祉センター
講師:永坂 美晴(兵庫県明石市社会福祉協議会 地域総合支援センター 地域支え合い推進担当係 係長)
山本 信也(兵庫県宝塚市社会福祉協議会 地域支援部 部長)

▼研修の詳細は下記URLをご参照下さい。

http://www.clc-japan.com/miyagi_c/2019_youko.pdf

<地域福祉コーディネーター中堅研修>

【仙台会場】1月20日(月)～21日(火) エスポールみやぎ
講師:藤井 博志(関西学院大学 人間福祉学部 教授)
浜上 章(宮城県サポートセンター支援事務所 アドバイザー
兵庫県川西市社会福祉協議会 桜小地区福祉委員会 委員長)
永坂 美晴(兵庫県明石市社会福祉協議会 地域総合支援センター 地域支え合い推進担当係 係長)

<地域支え合い活動実践研修 女川町編>

【女川会場】1月24日(金) 女川町生涯学習センター
講師:三浦 ひとみ(女川町健康福祉課 課長)
千葉 信二(女川町社会福祉協議会 地域福祉係 係長)
住吉 いつみ(女川町社会福祉協議会 生活支援コーディネーター)
大坂 純(東北こども福祉専門学院 副学院長)
高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)
志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)
池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

【研修日程変更のお知らせ】

台風19号の影響により、一部研修の日程が変更となっておりますので、ご注意ください。不明な点は下記事務局までご照会ください。

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

E-mail joho@clc-japan.com

☆次号予告 特集「自治会」